『譚綴』

『指輪』

九谷　六口

甲子谷（きねや） 辰夫は、今朝もつまらなそうな表情で出勤のため家を出た。
『皆、一所懸命仕事してるけど、信じられないな。どうせ、後何十年か経てば死んじゃうのに。後（のち） の世に名を残す事なんか出来ないし、残せても本人には判らない。所詮、人生なんて空しいもの。でも、だからと言って死にたくはないな。食べなくちゃ駄目だから、ま、仕方ない仕事に行くか』
いつものように会社に向かう。地下鉄に乗り、本を読むでもなく眠るでもなく、ただ、ボケーっと座席に座っている。何となく、視線を感じ始める。
『誰も、見てないようだけど視線を感じる。周りを見ても目が合う人は居ない。でも、感じるな』
降りる駅が近づくにつれ乗客が少なくなっていく。自然、車内を見渡せるようになる。
『あの老人だ。こっちを見てる。何故だか嬉しそうに微笑んでいる。こっちに来るよ。気持ちが悪いな。あっ、そうか、席を替わって欲しいんだ』
老人が目の前に立ちます。
「どうぞ」
甲子谷は立ち上がり、手を座席に向けた。しかし、老人は、座る様子も見せず甲子谷の前に立っている。知り合いの二人が立ち話をしているような雰囲気である。
「甲子谷さんですね。甲子谷 辰之進（たつのしん） 殿ですね」
「甲子谷ですが、辰之進なんて名前ではありませんが」
「いや、失礼しました。でも甲子谷さんですね。やっと。お会いできましたね。嬉しいです」
「確かに私は、甲子谷ですが……　失礼ですが、以前お会いしたことがありましたか?」
「甲子谷さん、車内では、何ですから、ホームに降りませんか?」
「残念ですが、会社に遅れますので……」
「あー、会社ですか……　会社ね……　私の話を聞いていただければ、会社なんてどうでも良くなると思いますが……」
甲子谷は、悪い予感がした。

Copyright 2003 H.Mitani

「済みませんが、会社に行きますので……」
と、席に座ろうとする。
「ま、そう言わずに……」
老人は甲子谷の手を取ったが、その力に甲子谷は驚いてしまう。ウムを言わせないものがあった。

ホームの真ん中にあるベンチに座り、老人は語り始めた。
「お会いしたのは貴方のご先祖です。甲子谷辰之進殿です。辰之進殿がご先祖であることは、ご存知ですよね?」
「知りません。何年前の話ですか?」
「かなり前のことです。貴方は、辰之進殿にソックリですよ」
この老人はボケが始まっていると甲子谷は思った。
「かなり前ですか、じゃー、私には関係ないことですね。それに、先程も言いましたが辰之進などという名の先祖がいたかどうかも知りません。まだ、間に合いますので会社に行きます」
「会社に行っても、ただボケーッとデスクの前に座わり、あー、くだらない。どうせいずれは死んじゃうのに。所詮、人生は空しいもの、と適当に仕事をするだけでしょ」
甲子谷は、何故、この老人が、そんな事まで知っているのか気味が悪くなったが、話を聞くくらいなら良いかなと思い始めていた。
「判りました。まだ、十五分くらいは余裕がありますので、お伺いしましょう」
「いや、ありがとう」
老人は、語り始める。

「甲子谷辰之進殿にお会いしたのは、関が原の戦いの最中でした。私は、この戦いにも空しさを感じていましたが、義理のためでしょうか、大阪方に参加しました」
「関が原? 義理? 誰に対する義理ですか?」
「そう急かせるものじゃない。太閤殿じゃよ。豊臣秀吉関白殿じゃ。命を助けられ

Copyright 2003 H.Mitani

たのじゃ」

「豊臣秀吉？　失礼ですが、お幾つですか？」

「拙者は、いや、失礼。私は、四百四十五歳になります」

甲子谷は、人生に一度くらい、このような狂人の話を聞く事があっても良いのだろうと思い始めていた。仕事など、どうでもよくなっていた。

「秀吉殿は、全国を征した後、種々の政策を施し日本を平和な国にしたが、それはそれは素晴らしい天下人でありました。しかし、年を取ってからがいけなかった。女子に手を出すわ、利休に切腹を命じるわ、少々頭がおかしくなっていたのかも知れませんな。

利休が死んだ翌年じゃった。大阪城に全大名が呼びつけられたのじゃ。主だった武将も一緒じゃった。拙者、乙城兵衛（おつぎひょうえ）も大広間に正座しておった。何故、呼びつけられたかは誰も知らんかった。あの光成（みつなり）茶坊主は事情は知っていたようじゃが、太閤殿がどのような決断を下したかは聞かされていなかったようじゃった。

皆、静まり返っておった。太閤殿が高座に座られた。皆、固唾（かたず）を飲んでお沙汰を待っていた。緊張しておったよ。わしもあのような緊張感は、生まれて初めてじゃった。

その時じゃ、何とした事か、ブーッ！　と、大きなオナラをしてしまったのじゃ。屁じゃよ。屁。普通であったら、ドッと笑い声が起こるのじゃが、さすがにこの時は違っていた。シーンと静まり返っているだけじゃった。わしは、青ざめるどころではなかった。静かに立ち上がり頭を下げ退出しようとした。屋敷に帰り切腹を覚悟したよ……」

まるで昨日の事を思い出したかのように、フーッと息をつく、

「その時じゃ、太閤殿が、乙城殿近こう、と手招きをするのじゃ。太閤殿が家臣に殿をつけて呼ぶ事はない。わしは、恐ろしかった。大勢の前で、どのような叱責を受けるのか、生きた心地はしなかった。皆の一番前に進み出ると太閤殿は、もっと、近こう、と言う。高座の端に座ると、もっと、もっと、もっと、と言うのじゃ。覚悟を

Copyright 2003 H.Mitani

決めて、傍に行くと扇子をひろげ、耳打ちするのじゃ。そしてこう言った、『感謝するぞ、兵衛。お主の馬鹿でかい屁で決めた。景気の良い屁であった』、とな。

わしは、何が何だか判らず気が狂う思いじゃった。そして、この指輪をくれたのじゃ。太閤殿は、大声で、乙城殿、席に戻って頂きたい、これから重要な沙汰を下す、と言ったのじゃ。

その時のお沙汰が、朝鮮出兵じゃった。後で茶坊主に聞いたが、太閤殿は皆の前に座った段階でも、まだ、決めかねていたらしいのじゃ。それが、わしの景気の良い屁を聞き、決心したというのじゃ。あの朝鮮出兵が、わしの屁で決まったのじゃ。こんなものじゃよ、世の中などは。空しいものじゃ。いずれにしても、本来であれば切腹であったものが生き延びた訳じゃ。ひ弱な屁をしていれば、このような事にはならなかったのにな。その場で切腹だったかも知れぬが、その方が良かった……」

老人は、何か意味ありげに言葉を切った。

「これが太閤殿に対するわしの義理じゃ。この時以後、わしの渾名(あだな)は、武平(ぶへい)になってしまったがな。

朝鮮では、酷かった。人間の醜さ、残酷さを絵に描いたようなものじゃった。意義を感じないで人を殺す空しさは、例えようもないものじゃ。わしは、殺し合いがいやで山奥で休もうと思ってな。竹林を分け入っていた時じゃった。朝鮮には虎がおってな。加藤清正の虎退治が有名じゃが、わしも、大虎に出会ってしまったのじゃ。

すごい虎じゃった。頭から尻尾まで十五尺はあろうかという大虎じゃ。黄金に輝く目をしていてな。でかい目じゃ。わしを睨みおってな。わしは諦めたよ。刀を抜いていても意味はない。刀を納めたよ。わしも大虎を睨み返していた。どのくらいの時間、そうして睨み合っていたかの……。しかし、大虎は、襲って来んのじゃ。黄金に輝き澄み切った目じゃった。

そのうちに大虎の話が聞こえてきたのじゃ。不思議な出来事じゃったなー。虎の話が判るのじゃよ。内容は、こうじゃった。

Copyright 2003 H.Mitani

『この国に対する仕打ちは許す事はできない。秀吉は、近々死ぬ。この殺傷は、お主のせいではないことは判っている。しかし、屁が決め手になったことも事実。お主には呪いを掛けることにした』

話し終わると、大虎は消えるように去っていったよ。全く音がしなかった」

「大虎は、何だったんでしょうね?」

「判らん。今になっても判らん。神か仏か? 朝鮮半島の守護神か? 判らん」

「呪い、って何だったんですか?」

「その話の前に、朝鮮出兵のその後を話した方が良いだろう。

大虎が言った通り、太閤殿は、次の年に死んだ。太閤殿が死に、朝鮮への出兵は全く意味がなくなった。たった一人の人間の妄想で大勢の人間が死ぬ。空しいではないか。わしは、益々人生が判らなくなっていた。日本に帰るには海を渡らねばならない。何隻もの船が用意された。そして何隻もの船が海に沈んでいった。わしが乗った船も沈んだが、助かったのはわしだけだった。

日本は、変わろうとしていた。その動きを左右できるのは、徳川殿だけじゃ。この事は、誰もが判っていた。しかし、それを許しがたいと思う連中がいた。豊臣の連中じゃ。茶坊主を筆頭に豊臣の時代を続けたかったのじゃ。これは、致し方ないことじゃ。そして、徳川殿が仕掛けたのが関が原の戦いじゃ。日本が二つに分かれた。日本の平和は、一つの勢力の元に成される以外にないようじゃった。徳川の時代が来る事は判っていた。茶坊主も、そんな事は判っていたはず。判っていながら遣らざるを得なかったのじゃ。

わしは、どちらでも良かった。豊臣の連中は、武兵は、どうするのじゃ、としつこく聞いたよ。わしは、あの時以来、武兵の名により有名人じゃったからのー。馳せ参ずるのであれば大阪方以外になかった。太閤殿に一度は命を助けられたからのう。参加はしたが徳川方を切るつもりはなかった。手柄などは、どうでも良かった。戦場から少し離れた山の中で戦況を眺めていた。

そんな時、甲子谷辰之進殿に出くわしたのじゃ。凛々しい武者姿であったよ。山の中で対峙し、名乗りをあげ、刀を交えた。腕が立つ武将だった。わしは、甲子

Copyright 2003 H.Mitani

谷殿であれば斬られても良いと思ったが……。
　激しい戦いだったよ。腕の立つ者は刀を交えながら相手の内面を知ろうとする。先の動きを読むためにな。甲子谷殿は気が付いた。わしに殺意がないことを。甲子谷殿は刀を下げた。わしも刀を納めたよ。甲子谷殿は近寄って来た。そして、わしに聞いた。
　何故、参戦したのか、とな。わしは太閤殿のことを話したよ。甲子谷殿が語りだした。日本を平和にするには徳川殿の力に頼る以外ない。早くこの戦いを終わらせなくてはならないとな。平和を作りあげる過程には、いろいろと汚い事もしなければならないが致し方ない。乙城殿も同じ考えだろうとな。全く同じ考えを持っていたよ。敵味方であったが、打ち解け合う事が出来た。
　二人は別れたが、別れ際に平和な時代に再会する事を約した。
　しかし、甲子谷殿は戦いの最中に倒れたと聞いた。わしは残念じゃったが仕方がない。わしは信じておった。甲子谷殿の事じゃ、なんらかの形で再会を果たしてくれるだろうとな。そして貴方に会った」

　甲子谷は、辰之進の姿を思い浮かべた。自分とは違い、強い志を持った先祖がいた。長い年月が自分のような空しさしか感じない人間を作りあげてしまったのだろうと自嘲気味に笑った。
「ところで、呪いについて、まだ、話してくれていませんが……」
「おう、そうじゃった」
　乙城は、指輪をいじりはじめた。他の指は枯れ木のようであったが、指輪をはめた左手の薬指だけは、まるで若者の指のようにしっかりしている。指輪は多少指に食い込み、体の一部のようになっている。その指輪を外し、甲子谷に手渡した。
「どうじゃ、太閤殿の指輪じゃ」
「金ですね。黄金の指輪ですか。きれいですね……」
「ちょっと、はめてみたらどうじゃ」
「そうですね」
　甲子谷は、軽い気持ちで指輪をはめてみた。

Copyright 2003 H.Mitani

「ぴったりですよ。驚いたな……。あれっ、抜けませんよ」
「抜けなくて良いのじゃ。わしも今日まで抜く事はできなかった。君にあげるよ」
「でも、こんな高価で由緒あるものを頂くわけにはいきませんよ。でも、抜けない！」
乙城は、ユッタリとベンチにもたれかかり、遠くを眺めるような眼差しになり、語りだした。

「甲子谷さん、わしは、これ以上空しさを感じながら生きていくのが辛くなった。済まないとは思ったが、指輪を渡す事にした。呪いは、この指輪にかかっているのじゃよ」
「どう言う事ですか?」
「大虎の話をしたな。先程、話した事は、半分だけじゃった。大虎はな、この指輪をしている以上、空しさの中で生き続ける、との呪いを掛けたのじゃ。死にたくなっても死なんのじゃ。しかし、体は、このように衰えていく。多分、七十歳を越えた位の体だと思うがな。最近は、ドッグイヤーとか言って、総てが七倍の速さで進むなどとホザいているが、わしはその逆、七倍の遅さじゃ。大虎は、こうも言った。命がけで戦った後、真に打ち解ける事ができた者に、この指輪を渡す事ができるとな。しかも、お主と同じように人生に空しさを感じている愚か者であれば、との条件付きじゃ。日清、日露、先の第一次、第二次大戦にも参加したよ。どんな厳しい局面に遭遇しても、わしだけは生き残こった。大虎の呪いは凄いものじゃ。命がけで戦い、指輪を渡せる相手を探したが居なかった。命がけで戦い、打ち解ける事ができたのは、甲子谷辰之進殿だけじゃった。しかし、甲子谷殿は、人生に空しさなどは抱いていなかった。諦めかけていた時に甲子谷さん、貴方に出会った訳じゃ。甲子谷殿の子孫じゃし、空しさを感じている。条件にピッタリじゃ。飛び上がりたいほど嬉しかったよ」
「しかし、酷い話じゃないですかっ！　直接関係のない私に、そんな事をするなんてっ！　私の先祖、辰之進は、こんな事のために再会を約束したんじゃないでしょう！　辰之進に申し訳が立たないでしょう！　酷い人だっ！」

Copyright 2003 H.Mitani

「そうじゃよ、その通りじゃ。甲子谷さんの言う通りじゃよ。でもな、これが人生じゃ。理不尽なものよ。わしの屁もそうじゃ。理由などない。結局、己の事が一番なんじゃよ。許してくれぬか。と申しても許せるものではないじゃろうが後戻りは出来ん。これが現実じゃよ。甲子谷さんが、これからどのような人生を送るか、わしは知らん。わしは、やっと空しさから開放され、死ぬ事ができる。幸せな気持ちと言うのを生まれて初めて味わったよ」

乙城は、笑みを浮かべながら枯れ木が折れるように死んだ。

甲子谷は、途方にくれたが、余りの出来事に、その場を動く事ができなかった。指輪は、しっかりと薬指に食い込んでいる。

乗客の通報により、公安官、警官が甲子谷を逮捕した。

ホームレスの金の指輪欲しさに犯した強盗殺人容疑である。死因は窒息死。被害者の体に痕跡はなかったが、高齢であるため口と鼻を塞がれただけで死亡したとの検死結果。指輪を外して検証することは、出来なかったが指輪の指紋は、老人と甲子谷のものだけ。老人の左手薬指には、指輪をはめていた痕跡がくっきり。この指輪は疑う余地もなく殺された老人のもの。

裁判で甲子谷は、指輪は老人から貰ったものであり、老人の体には指一本触れていない事を主張する。誰も耳を貸さない。余りの理不尽さに甲子谷は、裁判中にもワメキ散らす。裁判長の心象は、裁判毎に悪くなっていった。

さすがに、甲子谷は、乙城から聞いた話はできない。精神鑑定に持っていかれる事は必至。悶々と裁判を受ける以外にない。

判決が下った。反省の色は全くなく、裁判に対し侮辱にも値する態度。情状酌量の余地もない。依って、終身刑。

『えっ、終身刑！　死ぬまで刑務所？　死ぬまで……？』

了

Copyright 2003 H.Mitani

編集・発行者　エムツー・プラデオ
三谷　弘

二〇〇一年十一月十日

M²PlaDeO
Planning & Design Office
Copyright©Mitani

禁無断転載・複写

Copyright 2003 H.Mitani